

潟語り (十一)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

干拓前の河口

現在の八郎湖の河口は八郎潟の干拓によって新しくつくられたものです。かつて川は左に大きく曲がり、現在の江川漁協よりさらに秋田市寄りの地点から日本海に注いでいました。昭和十六年生生まれ、天王の旧街道沿いにお住みの京谷健一さんに昔の川と河口についてお聞きしました。

浅かったども、いろんな魚が捕れたなあ

この家のすぐ下。ほれ、あの松の木さ船をつないでいたんだ。小学校の頃は夏になれば川に入ってグンジ踏み。砂底だからぬがらねがったし、グンジもカレイもいっぱい。足の裏で探してビクビク動けばそのままふんづいで、手でつかめる。小学校のわらしでも二十や三十は捕ったな。

中学校の頃は弟と二人で船を動かして、「ふくべ網」を建てた。学校に行く前に網を起こし、学校から帰れば網を建てに行ったもんだ。川幅は三十メートル近くもあつたな。川の両端にはヨシがおがって、その先にはモクがいつべあつた。小学生でも遊べるほど浅かったども、船が通るごだけは深く掘ってだな。

海水が混じってたので、シジミも魚もいっぺいだ。ふくべ網を建てれば二月から三月はナットウゴリ。四月か

ら五月はマエビ。これはウナギの延縄のエサにしたもんだ。七月から八月はクルマエビ。なんと、川の中でクルマエビが捕れたんだがらなあ。九月から十月はまるまる太ったグンジだった。

シジミ貝は年中、「腰つき」で捕ったもんだ。冬でも水の薄い時は後ろ向きになってケツで氷を割りながらマングを引く。水温が下がればシジミも砂の下の方さ潜るもんだがら、同じ場所を二回も三回も掘らねばシジミのいる深さまでマングが届がねがった。

昔の川と河口のごどを知ってるのは、五十過ぎの人たちだけだべなあ。

